

3. 文化財の修復作業と新たな発見

①【収蔵庫の被災状況と再整理】

震災で、文化財関連資料の収蔵施設で保管されていた、市内の発掘調査で出土した考古資料や民俗資料が破損するなど、大きな被害を受けました。収蔵する棚自体が倒れたり、棚に並べてあった資料が収蔵箱ごと通路に多数落下したりして、個々の資料も多くが破損してしまいました。これらの被災した資料の復旧・修復作業は、震災の翌年から本格的に実施することになりましたが、細かく破損してしまった資料も多く、1つ1つの資料を根気強く確認し、ある程度震災前の状態に分類・整理して収蔵する作業だけでも大変な苦勞がありました。その後も、少しずつ個々の収蔵資料の復原作業などを実施しており、現在も作業を行っています。

このように収蔵資料全体の修復作業を行ってきた中で、これまで未公開であった資料や、以前は気付かなかった新しい発見もありました。ここでは、そのような資料についていくつかご紹介いたします。



震災直後の収蔵庫内のようす



震災直後の収蔵庫内のようす

○十三塚遺跡出土の遠賀川系土器

十三塚遺跡出土弥生土器は、十三塚公園整備のために実施した昭和 53 年度の調査で出土した壺形の土器です。以前は、東北地方に稲作をはじめとする大陸文化が伝わったのは、弥生時代の後半以降と考えられていました。しかしその後の発掘調査により、弥生時代の初め頃には、すでに東北地方の北部域まで大陸の文化が伝わって来ていた事が明らかとなりました。それは、東北地方各地から九州の弥生時代初め頃の土器である遠賀川式土器と特徴を持つ土器の出土例が知られるようになり、また、青森県の垂柳^{たれやなぎ}遺跡で、弥生時代初め頃のものと考えられる水田跡が発見されたことなどによるものです。

こうした事実を裏付ける資料として貴重な事から、市の指定文化財になっています。

左側の写真は、震災前の土器の状況を撮影したのですが、震災により収蔵棚から落下して、破片がばらばらになってしまいました（写真右）。その後、壊れ

た破片を集めて元の形に戻す作業や、収蔵庫内に散乱してしまった考古資料全体の再整理作業を行った所、これまで壺の上半部しか無い状態でしたが、新たに下半部の破片が見つかり、ほぼ全体の形が分かるようになりました。



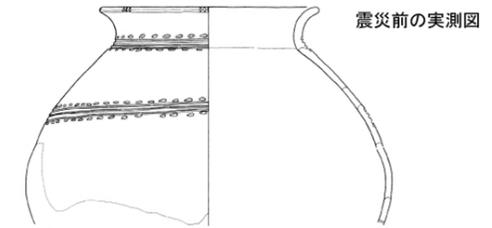
修復前の遠賀川系の壺形土器



収蔵棚から落下して
破損した壺形土器



修復後の遠賀川系の壺形土器



震災前の実測図



再整理後の実測図

震災前と再整理後の実測図

②【寄贈資料の整理】

寄付資料から—市内出土遺物—

寄贈資料の大部分は昭和 20 年代から 60 年代にかけて採集されたもので、名取市内の大規模な開発が始まる前の時期のものであり、調査もされないまま消えてしまった遺跡などからの出土品もあり、資料として貴重なものです。

残念ながら採集から長い年月が経過したため、出土場所を明記した紙片が劣化し解読できないものもありますし、正確な出土位置の記載がない資料も少なくありません。

寄付資料の中で出土遺跡が明確であるものについて、紹介したいと思います。

うがさき
○宇賀崎貝塚（愛島小豆島字宇賀崎）

愛島丘陵の南縁から南に半島状に突き出た部分、標高 12.7～7.5m 付近の南斜面に広がる遺跡です。南斜面と東斜面と 2 か所に貝層の広がりがあります。南側斜面の貝層は個人住宅建設時に大きく斜面が削られ断面に幅 6m、層厚 0.7m 部分が露出しています。削平時に多量の遺物が出土したことが伝えられていますが現存しません。

東斜面の貝層については、昭和 47 年(1972) 宅地造成に伴い宮城県教育委員会により発掘調査が行われました。調査報告によると貝層は上下 2 枚に大別され、上部はヤマトシジミを主体とし、下部はハマグリ、アサリを中心とした貝類で形成され、出土遺物から、下部は縄文時代前期、上部は縄文時代中期のものと考えられています。

出土遺物には、縄文土器、弥生土器、須恵器すえきなどのほか、石鏃せきぞく、石匙いしさじ、石斧などの石製品、骨針ほねばりなどの骨角器こっかくきが出土しています。

貝層は 2 か所ありますが、出土遺物がどの地点からの出土品かを示すものではありません。

寄贈者

桜田 保

縄文土器(縄文時代前期) 深鉢

(飯野坂 桜田の注記があり、ほかの遺物には明治 35 年の記載があります)

○十三塚遺跡（手倉田箱崎、屋敷）

名取市を代表する遺跡の1つで、愛島丘陵の北部にあり、野田山貝塚^{のだやま}に對面する東の丘陵上にあります。標高20～30mの付近全体に遺跡が広がり、これまでの発掘調査で、弥生時代～古墳時代の住居跡や、縄文時代～平安時代の土器や石器などが出土しています。なかでも、弥生時代中期後半の土器は、周辺地域のこの時期の典型的な土器として「十三塚式」の名前が付けられています。また、弥生時代前期の遠賀川式に似た土器が出土したことも知られています。

古くから遺物が採取されており、縄文時代～平安時代までの土器はありますが、出土地点の詳細を示すものがないため、ここでは石器類を紹介します。

寄贈者

今野三幸氏

ませいせきふ だせいせきふ いしきり せつかく おういし
磨製石斧 打製石斧 石鏃 石錐 石匙 石核 凹石

小野 力氏

いしやり いしやりみかんせいひん
打製石斧 石槍 石鏃 石槍未完成品

名取高校郷土班

磨製石斧

おおきど
○大木戸貝塚（愛島小豆島字大木戸）

愛島丘陵の東南部分が東南方向に延びる丘陵先端付近、標高 30m の丘陵上に位置し、らいじんやま雷神山古墳西側の丘陵部、しみずみね清水峯神社北東畑内に広く貝殻が散布していました。

名取ニュータウンの建設により昭和 42 年に一部調査が行われましたが、その後工事により消滅しています。調査によれば、貝層はヤマトシジミを主体とし、一部カキ・アカガイ・ニシ類などかんすい鹹水産の貝類も混在しています。貝層の厚さは 0.25m を測ります。

遺物は縄文土器、石鏃などの石製品が出土しています。出土土器から早期に形成されたものと思われます。

また消滅した部分以外にも、小規模ながら同神社東側斜面にハマグリを主体とした貝殻が土器とともに散布していることが確認されています。

寄贈者

桜田 保氏(清水峯神社後方山畑の紙片あり)

縄文土器(縄文時代後期～晩期) 深鉢 浅鉢

貝類(ハマグリ、シジミ、マガキほか)

○ 経きょうの塚つか古墳(下増田字西経塚)

経の塚古墳と呼ばれる直径3.6m・高さ7mで、しゅうこう周溝を持つ円墳がありましたが、土取りや道路工事などによって墳丘は完全に崩されてしまいました。明治時代末や大正時代に行なわれた発掘調査では、2体分の人骨、鹿の角製の飾りが付いた2本の刀、漆塗りの櫛などが納められた長持型組合石棺ながもちがたくみあわせせっかんと呼ばれる石製の棺、国の重要文化財にも指定されている家形・よろい鎧形・はにわ円筒形の埴輪などが出土しています。これらの出土品のうち長持型組合石棺・家形埴輪・鎧型埴輪については、日本最北の出土例としても貴重なもので、そのほかの出土品などからも、経の塚古墳が当時の中央の権力者と密接な関係にある人物のお墓であり、およそ5世紀中頃に築造された古墳であったと考えられています。

下増田飯塚古墳群とは、位置関係や立地、鹿の角製の飾りが付けられた刀が副葬品として見つまっている点など、密接な関係にある古墳として注目されます。

寄贈者名不詳

円筒埴輪 (古墳時代中期) 39.9.6の注記があります

桜田 保 (明治35年頃)

円筒埴輪

○雷神山古墳(植松字山・愛島小豆島字片平山)

ぜんぼうこうえんふん

東北地方最大の前方後円墳で、市内中央に位置する愛島丘陵(標高 40m 前後)の東端に位置しています。古墳の規模は全長 168m、後円部径 96m・高さ 12m、前方部長 72m・前端幅 96m・高さ 6m を測ります。墳丘は三段に築成され、葺石を伴い一部に周溝も確認されています。また、この古墳のすぐ北側に隣接して、直径 54m・高さ 6m、三段築成で周溝を持つ小塚古墳(円墳)があります。

雷神山古墳の造られた年代は、古墳の形状や立地及び築造方法、また出土した遺物から古墳時代前期、4 世紀末頃と考えられています。また、古墳時代前期という時期に限ってみれば、東日本でも最大級の古墳となり、古墳の大きさから推定するとかなり広い地域を治めた地方豪族の首長の墓と考えられます。

寄贈資料の中に多くの雷神山資料がありますが、細片が多いため全部は紹介していません。

寄贈者名不詳

壺型埴輪 (古墳時代前期)

こんごうじ
○金剛寺貝塚（高館川上）

いまくまの くつきよく
今熊野遺跡の東側、東へ延びる丘陵先端部が北東へ屈曲する尾根上平坦部標高 50m付近に、東、南、北斜面で貝層が確認されています。貝層の広がりには北側で、250 m²、南側で 150 m²、層厚は 0.8mを測ります。北側の貝層は昭和 22 年に調査され、ヤマトシジミを主体としアサリ、ハマグリなどの貝類、石鏃などの石製品、骨針などの骨角器、縄文土器(前期・後期・晩期)、弥生土器、須恵器などが出土しています。

この地点の縄文土器は古くから、金剛寺式と呼ばれる縄文後期の代表的な土器として知られており、本貝塚はこの時期の標式遺跡ひょうしきいせきとなっています。西側の貝層からは主として、縄文時代晩期の遺物を出土しています。

紹介する資料は、貝塚内のどの地点の出土品かは不明です。金剛寺貝塚出土遺物として取り扱っています。

寄贈者名不詳

縄文土器(縄文時代後期) 深鉢

寄贈者名不詳

石皿 たたき石(S37.10の注記あり)

貝類(ハマグリ、シジミ、マガキほか)

寄贈者 遠藤

縄文土器(縄文時代後期) 浅鉢

あさまち

○朝町遺跡(高館川上字朝町)

高館浄水場の北 300m 付近、増田川右岸に形成された扇状地上、標高 23m 前後に位置しています。遺跡の範囲は、100×200m の範囲で広がっているものと思われる、縄文時代中期末～後期にかけての土器、奈良～平安時代にかけての遺物が出土しています。

寄贈者 佐伯武蔵氏

縄文土器(縄文時代中期末～後期) 深鉢 浅鉢

○山畑南貝塚(愛島北目字窪穴)

岩沼市との境界に位置し、名取市では古くは柚木貝塚と呼ばれていましたが、岩沼市側では山畑南貝塚と呼ばれ、現在の遺跡名としては山畑南貝塚として記載されています。

遺跡は名取平野に向かってのびる丘陵の標高 50m 付近の東斜面に位置し、およそ東西 250m × 南北 250m の範囲に遺物が広がっています。

古くから縄文時代中期の貝塚として知られ、多くの人の手により遺物が採取されています。本格的な調査は戦後の東北大学によるもので、発掘調査では、ヤマトシジミを主体とする貝塚であること、遺物では縄文土器、石鏃、石斧、奈良～平安時代の須恵器、土師器、瓦などが出土しています。

寄贈者名不詳

縄文土器(縄文時代中期) 深鉢 浅鉢 土偶

にしきたはたけ

○西北 畑 遺跡(高館川上字北畑)

高館浄水場の北 400m付近、増田川左岸に形成された扇状地上、増田川に向かい緩やかに南へ傾斜する地点、標高 20m前後に位置しています。遺跡の範囲は、200m×200mの範囲で広がっているものと思われ、縄文時代中期末～後期にかけての土器、奈良～平安時代にかけての遺物が出土しています。朝町遺跡とは、増田川を挟んで近接しており、増田川流域に形成された段丘及び扇状地上には、同時期の遺跡が広がっているものと思われす。

寄贈者 遠藤修也氏

縄文土器(縄文時代中期) 深鉢

びしゃもんどう はにわ
○毘沙門堂古墳の埴輪

この古墳は、直径約 50m、高さ 8mの円墳^{えんぷん}で、すぐ北側に増田川が流れているため、墳丘^{ふんきゅう}が多少削られ変形しています。また、墳丘南側に前方部が崩れたような地形が確認されているため、帆立貝式^{ほたてがいしき}の前方後円墳^{ぜんぽうこうえんぷん}だった可能性も考えられる古墳です。墳丘には葺石^{ふきいし}などは見られませんが、円筒埴輪^{えんとうはにわ}と朝顔形円筒埴輪^{あさがおがたえんとうはにわ}が出土しています。東北地方の円墳の中では大形のもので、出土遺物から推定すると 5 世紀中頃^{ちくぞう}に築造された古墳と考えられます。

細片を含むと多くの採集品がありますが、円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪など市教委が所蔵する資料とを合わせ、一部を復元し紹介します。

寄贈者名不詳

円筒埴輪 (古墳時代中期)

桜田 保 (明治 35 年頃)

円筒埴輪

③【新宮寺文殊菩薩の修復】

震災後に文化財レスキュー事業で応急修理されていた新宮寺文殊菩薩像は、現在、本格的な修理作業を実施しているところです。修理のため獅子や光背、台座などを分解した所、文殊菩薩像の光背頭光部の八葉蓮華裏面部分から、「**修 理 十 貫、作 者 秀 海、文 明 十 五 年、七 月 吉 日**」と記された墨書が見されました。内容から、文明15年（1483）の7月に、秀海が十貫文で修理を行ったというものですが、秀海と言う人物に関することや、何処で、どこまでの修理を行ったものか、詳細は不明です。

1貫文=1,000文なので、10貫文=10,000文の修理費用がかかったこととなりますが、どの程度の金額なのでしょう。これを、お米の値段（お米の値段は地域や時期により変動も大きいので参考ですが、修理が行われた文明年間（1469～1486）の京・奈良付近における価格を参考）で考えてみると、成人が1年間に食べるお米の量を1石（約1000合：1日あたり3合×365日=1,095合）とする

と、その当時の1石の価格は1.1貫文前後ですので、10貫文は、およそ成人9人の1年分のお米の値段に相当します。



修復作業のようす



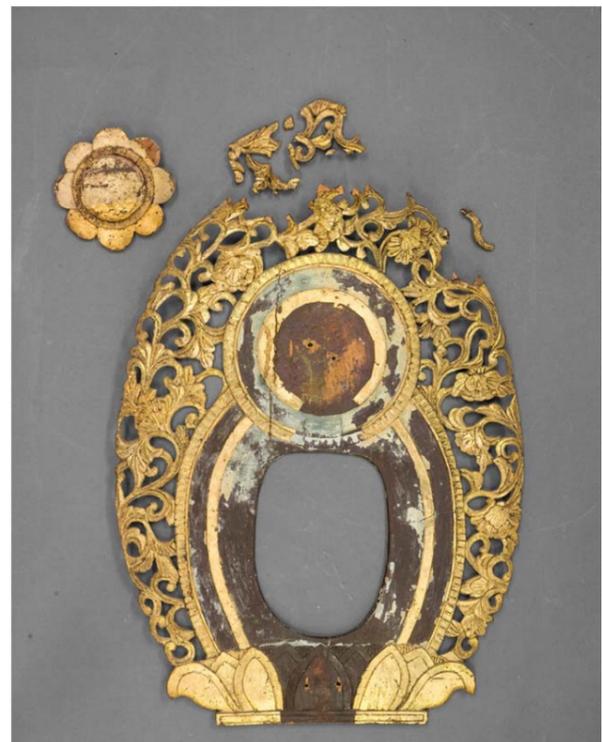
文殊菩薩像解体のようす



修復の際に発見された墨書



蓮台解体のようす



光背解体のようす



獅子解体のようす